

# セナンクールの自然

## —『オーベルマン』をめぐる—

佐 藤 夏 生

1. セナンクールについて
2. 『オーベルマン』について
  - §1 出版とその研究史
  - §2 『オーベルマン（第3版）』の構成、内容
3. 『オーベルマン（第3版）』における自然
 

<ol style="list-style-type: none"> <li>§1 旅あるいは移動</li> <li>§2 ティエルの夜</li> <li>§3 ダン・デュ・ミディ南嶺峰</li> <li>§4 森</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>§5 色、匂い、音</li> <li>§6 水 一河、急流、滝一</li> <li>§7 グラン・サン＝ベルナル峠</li> <li>§8 風景</li> </ol>
--	--
4. セナンクールの自然観

### 1. セナンクールについて

まずは、作家エチエンヌ・ピヴェール・ド・セナンクール Etienne Jean-Baptiste Pierre Ignace Pivert de Senancour (1770-1846) の足跡をたどる。以下は、セナンクール年譜である。主として、2003年刊行の『オーベルマン』 *Oberman* (Flammarion) の註釈者ファビエンヌ・ベルスゴル Fabienne Bercegol 作成の年譜を参照している。ベルスゴルの年譜は、娘ウーラリ Eulalie が父親の生涯について書き、あるいは友人のド・ボワジョラン Vieilh de Boisjolin が作家から聞き書きした文章（アンドレ・モングロン André Monglond がその研究書に再録）を踏まえ、また『オーベルマン』などの作家自身の著述内容によって、確定あ

るいは推測の上、作成された。

セナンクルの父クロード＝ロラン Claude Laurent は、パリで帽子販売業を営むブルジョワの一族の出であった。ピヴェール・ド・セナンクル Pivert de Senancour と「ド」を付けて名乗りはするが、貴族の出身ではない。ブルジョワが姓を貴族風にして名乗る、そのことが、貴族とブルジョワの実質的な境界線が曖昧になっているフランス社会を示している。34歳の時に、4歳年上の従姉であるマリ＝カトリーヌ・ピヴェール Marie Catherine Pivert と結婚した。夫は聖職者志望であり、妻も宗教界にひかれていた。一人息子のセナンクルは、ジャンセニスト<sup>1)</sup>的に厳格な教育を受けた。母親に連れられては教会通いをする、内向的で陰気な生活の中で、子どもは『ロビンソン・クルーソー』などの読書に熱中した。1774年に父親はパリ市庁の地租総監査官の職を得て、一家の経済状態を安定させた。

84年から、パリ北方シャリ Châalis に近いフォンテーヌ Fontaine で、その地区の主任司祭のもとで寮生として学び、かたわら田園に親しんだ。次いで85年から88年まで、パリ南方にあるフォンテーヌブロー Fontainebleau の森に接するバス・ロージュに住む友人たちの家に両親とともに滞在し、自然の中を歩き回る。

85年から89年までの4年間、パリの聖ジュヌヴィエーヴ丘にあるコレージュ・ド・ラ・マルシュの寮生生活。内気で、孤独を好む性格で、学友たちと打ち解けることはなかったが、ただ一人フランソワ・マルコット François Marcotte と友人となる。

啓蒙思想家たちの著書を読み、みずからの信仰心に確信が持てなくなっていたセナンクルは、父親が勧めるパリのサン＝シュルピス神学校入学を拒否した。1789年8月14日、父には何も告げぬまま、母の助けを借りて、決然とあてどない旅に出る。スイスのサン＝モリスで一人の

まま冬を越す。1840年刊行の『オーベルマン』*Obermann*は、第3版にして最終版であるが、この版で初めて付け加えられた巻末の手紙XCIによって、ダン・デュ・ミディ 南齒峰の試登の後に、彼がグラン・サン＝ベルナル峠まで登りに出かけたことが分かる。これが、彼の神経を痛め、後年の麻痺のきっかけとなった山行であった。遭難の後、九死に一生を得て、そのまま峠を越えて、イタリアのアオスタ谷にまで至る。

1790年1月に、スイスのフリブルまで行き、下宿先のダゲ家 Daguét の娘マリ Marie を愛するようになる。7月には、ソシュール Horace-Bénédict de Saussure<sup>2)</sup> とベルナルダン・ド・サン＝ピエール Bernardin de Saint-Pierre<sup>3)</sup> に手紙を書き送っている。自分一人で住むのに適した、どこか山あいの谷かあるいは島はないか、と助言を求めた。しかし、この計画にもかかわらず、20歳のセナンクルは、マリの父親によって持参金なしの娘との結婚を迫られたのかもしれない。1791年、おそらくは結婚報告のためにパリへ帰宅。娘ウーラリ、次いで息子フロリアン＝ジュリアン Florian Julien 誕生。

92年、『原初時代 人間の不確定性について』*Premiers Ages, Incertitude humaines* を刊行。著者名を「アルプスの夢想家」として。

93年スイス、ティエルに一人で滞在。おそらく一人でウンターヴァルデン Unterwalden まで足を延ばしている。ヌシャテルにて、『現世代について 人間の不条理性』*Sur les générations actuelles, Absurdités humaines* を同様の著者名で出版。

94-95年ころ、一人でパリへ帰宅。恐怖政治に終止符が打たれた後、アシニャ紙幣の価値下落により破産の憂き目を見る。父母の死去。友人マルコットとその妹であるド・ヴァルクナエール夫人 Mme de Walcknaer に会った。

夫人とは互いの性格が似ているところから、愛情が芽生えた。共和国第3年のパリで、『アルドマン あるいは名も無きことの幸福』*Aldomen ou le bonheur dans l'obscurité*を「市民ピヴェール」の名で刊行する。

98年から1802年まで、家庭教師としても友人としてもボヴォー館に通う。女主人のドウドト夫人 Mme d'Houdetot（ジャン＝ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau が1750年代後半に通ったサロンで、憧れの対象であった女性である）のもとで、詩人のサン＝ランベールなどの文人と、そして多分スタール夫人 Mme de Staël とも出会った可能性がある。

99年、『人間の根源的性質についての夢想』*Rêveries sur la nature primitive de l'homme*を刊行。1800年には、ドウドト夫人の孫であるフレデリック・ドウドト Frédéric d'Houdetot とともにパリ周辺散策。フォンテヌブローにも滞在したのではないか。ド・ヴァルクナエル夫人との再会。

1801年、ド・ヴァルクナエル夫人との文通を妨害される。夫の決闘申し込みを拒絶。（ウーラリの記述）。『オーベルマン』*Oberman*を執筆し始める。

02年、スイス、フリブールへ帰宅。数年ぶりの家族との冷ややかな再会。不在中に妻が不義の子を出産していた。

03年、フリブール近辺のシュブリュ城に滞在。ジョラ山、ラ・グリュイエール、シュワルツゼー、トラヴェール谷を散策したようだ。年末にパリへ最終的な帰宅。

03-04年、フォンテヌブローへ娘とともに滞在。『オーベルマン』を刊行するも評価を得ない。06年、スイスに残った妻の死。実子2人（14歳、12歳）をパリへ引き取る。『愛について』*De l'amour*刊行。ス

キャンダル的だが一定の評判を得る。

07 年、『ヴァロンブレ』 *Valombré* (散文による 5 幕の戯曲) 刊行。08 年、『愛について』第 2 版。09 年、『人間の根源的本質についての夢想』(以下、『夢想』と略記) をかなり書き直して刊行。再刊行をあきらめた『オーベルマン』の中の断章をこの中に書き込む。自身の人生が失敗であるという感情につきまとわれ、隠棲。きびしい介添え役の娘が、その死まで世話をする。

11-12 年、生活のために、文筆業。「メルキュール・ド・フランス」誌 *Mercur de France* に「描写における文体」、「フォンテヌブローについて」、「小説についての論考抜粋」、「文学における成功」、「作家あるいは弁論家の諸原則、特性、諸意見に応じた文体について」などの論説。メルシエ Mercier、ノディエ Nodier など文学者たちと交流。

14 年、『ヴォージュ山地からの手紙』 *Lettres d'un habitant des Vosges* で、ブオナパルテ (ナポレオンのあだ名)、シャトーブリヤン Chateaubriand などに批判を加えた。

15 年、ナポレオン批判を出し、シャトーブリヤンと論争に。16 年、シャトーブリヤンの『キリスト教精髓』 *Génie du christianisme* についての批評を出版。かつての義父からの亡妻の不義の子を認知してくれという要請から逃れるために、南仏マルセイユ、ニーム、次いでセヴェンヌ山脈のアンデューズに 1 年半滞在。

18 年、「コンスティテュシオネル」紙 *Le Constitutionnel* に盛んな寄稿。論説は全部で 900 以上になった。

19 年、『世界からの離脱と宗教的な道德の他の目的について、ある名もなき隠棲者による自由な瞑想録』 *Libres Méditations d'un solitaire inconnu, sur le détachement du monde et sur d'autres objets de la morale religieuse* (以下、『自由な瞑想録』と略記) を刊行。セナンク

ールは、次第次第に、世界の神の秩序についての類推的な瞑想に、また教条主義を脱却した信仰への神秘主義的な探求に、没頭するようになる。

23-27 年、「19 世紀メルキュール」誌 *Mercur du XIXe siècle* に寄稿。「ロマンティック文学についての考察」*Considérations sur la littérature romantique*、「ロマンティックな夢想」*Songe romantique*、「19 世紀の散文について」*De la prose au XIX siècle*、「花々」*Des Fleurs* など。歴史研究書も刊行。『要約中国史』*Résumé de l'histoire de la Chine*、『道徳・宗教の伝統の歴史要約』*Résumé de l'histoire des traditions morales et religieuses*、『要約ローマ史』*Résumé de l'histoire romaine*。セナンクールによる神秘主義的な探求によるキリスト像は、反動的な教権勢力の反撃に遭い、法廷で有罪宣告を受けるが、控訴院で無罪となる。

29 年、『愛について』第 3 版。30 年、『自由な瞑想録』第 2 版。

32 年、「パリ」誌 *Revue de Paris* に掲載された、サント＝ブーヴ Sainte-Beuve（当時、活躍の評論家・小説家）の論説に取り上げられる。それまで日の目を見ずじまいであった『オーベルマン』*Oberman* が、後にロマン主義文学者たちによって再評価されることになる決定的なきっかけとなった。

33 年、『オーベルマン』*Obermann* 再版。サント＝ブーヴが序文を書いた。ジョルジュ・サンドが「両世界」誌 *Revue des Deux-Mondes* に、ノディエが「時」誌 *Temps* にそれぞれ論評を発表し、それがセナンクールの声価を高めることとなった。夢にも思っていなかった再版刊行にあたって、著者は初版タイトルであった *Oberman*（高地の人）の綴りを *Obermann* に改訂している。もともとの由来であるドイツ語に、より忠実に沿ったことになる。ティエール Thiers（ルイ＝フィリップ市民王体制の首相）が、1200 フランの年金支給を裁定。先行版より大幅に書き直された『夢想』を刊行。小説『イザベル』*Isabelle* 刊行。次の

年には、『単なる真実の小辞典』*Petit Vocabulaire de simple vérité*の再版。

40年、ジョルジュ・サンドによる序文の付いた『オーベルマン』*Obermann*第3版。これも第2版同様*Oberman*ではなく、*Obermann*になっている。以降、1844, 47, 52, 63, 74年に刊行される。年金で生活は保障されるが、身体障害が進み（進行性筋障害）、麻痺のせいで両手が不自由、歩行も困難となる。41年には年金が減額される。

44年、人に依頼して、ドイツでの『自由な瞑想録』再刊行を試みる。晩年のセナンクールは、この書に熱意をもって手を入れていた。

46年、サンクルーにて、人知れず死去。76歳。上記『自由な瞑想録』からの引用句が墓碑銘となる。「永遠よ、我が安息地となれ」。数紙のみによる簡単な訃報。

## 2. 『オーベルマン』について

### §1 出版とその研究史

本論の中心となる『オーベルマン』がどのように執筆され、世に出たかについて、整理しよう。

19歳のセナンクールがとりあえず父親の圧力を逃れて出奔したのは、1789年8月14日である。パリの蜂起した民衆による、専制の象徴とされていたバスチーユ襲撃がフランス革命の発端となったのが、ちょうど1ヶ月前の7月14日であった。7月末には農村で「大恐怖」と言われる反乱が起こり、8月4日には議会で封建制廃止の決議がなされ、8月26日には「人権宣言」が採択された。つまりセナンクール（1770年生まれ）は、地殻変動ともいうべき未曾有の変動を開始したフランス、騒然として非日常的空間に変容し始めていたに違いない生まれ故郷パリに決

然と背を向けて、一人で歩き始めたのだ。同世代のスタール夫人（1766年生まれ）、バンジャマン・コンスタン Benjamin Constant（67年生まれ）、シャトーブリエ Chateaubriand（68年生まれ）が、当時からそれぞれの人生をかけて革命、他ならぬ歴史にかかわって行った経過とは対照的である。

自然豊かなスイスがとりあえずの行き先となったのは、18世紀の巨人ともいべき作家、思想家である、スイス出身のルソー Jean-Jacques Rousseau の、スイスを舞台としたベストセラー書簡体小説『ジュリあるいは新エロイズ』（1761年）の影響を受けていることは間違いない<sup>1)</sup>。

また、何よりも少年期のセナンクールが、パリ北方の田園地方や南方のフォンテヌブローの森の中で暮らし、自然の中にあることが何より好きであったからだ。しかし、当初セナンクールが漠然たる目的としていたのは、アフリカかエジプトの未開の民のために立法者となって自分の生涯を捧げるという、啓蒙思想の申し子のような志であった<sup>2)</sup>。

意気揚々とジュネーヴ入りをし、東西に三日月のように細長いレマン湖に沿って、徒歩で東側のサン＝モリスまで行き、そこで冬を過ごす。年が明けると、スイスのフランス語圏であり、スイス内のカトリックの牙城のような修道院・教会のあるフリブールへ移動する。美しい風景が気に入りもして、そこで足を止め、結婚、定住することになる。

94-95年ころ、ロバスピエール一派の粛清後に、一人でパリへ帰宅したものの、破産して経済的に逼迫した生活で身動きならない。その中で、家庭教師の職を得て、ボヴォー館で文学者たちと交友する生活を得ることができた。『夢想』を刊行し、『オーベルマン』を執筆する。

スイスの家族のもとに戻ることは、生計を得ていたその生活を断念することを意味した。再びパリに戻ったときには、やはり以前の生活に復



帰することはかなわなかった。1804年、『オーベルマン』を刊行する。反響はなかった。再版することはないと思い定めて、09年、『夢想』の中に、『オーベルマン』の中の断章を書き込む。

生計を得るためにも執筆活動は続いた。貧しく、健康は損なわれていたが、1832年、当時活躍していた評論家にして小説家のサント＝ブーヴに見出された。作家は60歳を越えていた。33年、『オーベルマン』*Obermann* 再版。サント＝ブーヴは、『オーベルマン』が19世紀初頭に出た小説の主人公たち、スタール夫人の『コリーヌ』やシャトーブリヤンの『ルネ』の兄弟であることに気づいたのだ。

ジョルジュ・サンドは、ヴェルテル、ルネ、オーベルマンの名を連ね挙げて、セナンクールが、1830年代のフランスにイギリス、ドイツから波及してきた新しい文学の先駆者であると位置づけている。新しい文学とはロマン主義のことである。

初版を出した34歳の青年は、1840年には70歳になっている。同じ『オーベルマン』ではあり得ないのだ。40年近くの時経過に応じて、内容、文章に検討がされ、ある部分は削られ、また古くなった言い回しに修正が加えられたことが、ディディエの『オーベルマン 最終版』の解説で明らかになっている。また巻末には、1804年版、1833年版、1840年版のヴァリエント（異文）が付されている。ディディエは、1985年に1804年初版テキスト<sup>3)</sup>を、2003年には1840年第3版テキスト（序文 ジョルジュ・サンド）を刊行している<sup>4)</sup>。また、セナンクールその人が、その生涯にわたって自身の著書を手もとにおいて、ひっきりなしに加筆・訂正を加える作家であったことを明らかにしている<sup>5)</sup>。この小論では、初版との違いまでには踏み込まず、ディディエによって確立された第3版テキストを使用する。

1840年以降、1874年まで第3版が最終版として刊行された。その後、

フランス国内でも、ドイツ、イギリス、イタリアなどでも、『オーベルマン』についての著書や論文が途切れたようには見えない。しかし、1924年にド・ブルタレスが、シェイクスピア、ラ・フォンテーヌ、バンジャマン・コンスタン、マルセル・ブルーストとともにセナンクールを取り上げて、『オーベルマン』を大衆には知られていない、繊細で非凡な文学書の一つとして愛好している、と述べている<sup>6)</sup>。一般読者にはなじめない、ともすれば忘れられがちな存在であった。

ロマン主義文学史上にしっかりと位置づけされたとは言え、このあまりにも地味な小説が再び脚光を浴びたのは、1947年刊行のアンドレ・モングロン André Monglond の著書の力が大きい。全3巻のうち、第1巻は研究書であり、続く2巻が「セナンクール氏によって刊行された手紙」という副題がついた『オーベルマン』である。1804年初版に拠っているが、巻末に補遺として、1933年版に付け加えられた手紙XC、および1940年版の手紙XCIが収録されている<sup>7)</sup>。

ちなみに、1940年の日本において、仏文学者の市原豊太が訳業を半分以上、進めていた。辰野隆教授の授業で初めて読んだとのことである。第二次世界大戦中の休筆期間を経て、1958年になってようやく完全な翻訳が岩波文庫から出た。訳者は巻末の解説で、1947年のモングロンの著書が出て、ようやく色々なことが理解できた、と述べている。日本で、モングロンに先駆けてセナンクールを愛する仏文学者が存在したことは、ディディエがその研究論文、研究書で一度ならず言及している。

モングロンは、セナンクールをフランス・ロマン主義の先駆者との位置づけを確認するが、そればかりに留まらない。ボードレールの半世紀前にあって、作家は自然の中に記号やアナロジーの広大で複雑なシステムを発見することができた、と述べる。詩人として、音楽家として、「もろもろの香り、色、音はたがいに応え合う」あのコレスボンダンス、

あの長いエコー<sup>8)</sup>を言語に翻訳することができた、とロマン主義のみならず、象徴主義の先駆者である、という認識を述べている<sup>9)</sup>。

研究書『オーベルマンの日記』および『オーベルマン セナンクール氏によって刊行された手紙』というタイトルが、そのままモングロンの姿勢を表わしている。モングロンは、終始一貫してこの小説を純然たる虚構と捉えることはない。作者セナンクールの足跡と、主人公オーベルマンの足跡をいちいち比較検討している。細かいところでは、パリ北方の地名シャリが『オーベルマン』ではシェッセルとなって「偽装されている」とか (p.141)、パリではなくリヨンとしているのは「アリバイ」であるとか (p.223)、「足跡をくらましている」 (p.250) とかいう指摘がされている。しまいには、セナンクールはシャトーブリヤンと同様で、自身と異なる小説の主人公を設定できない (p.336) とまで結論づける。どんな小説の主人公にも作者自身の投影がなされているのは当然のことであるが、モングロンは、セナンクールが自身の実際の経験の細部を変えながら小説仕立てにしている、という思考から出発している。

そのモングロンに対しても、これに先行する研究者のメルラン<sup>10)</sup>、ミシヨ<sup>11)</sup>に対しても深い敬意を払いながら出てきたのが、ベアトリス・ディディエ・ル・ガル Béatrice Didier Le Gall の『セナンクールにおける想像世界』<sup>12)</sup> という大著であった。ディディエは、先に述べた2003年刊行の『オーベルマン 最終版』の解説で、セナンクール自身は生前、この主人公を自画像であるとは認めなかった、と述べている。

1985年には、ディディエの初版『オーベルマン』の他に、モノワイエによって第3版『オーベルマン』<sup>13)</sup> も刊行された。両書ともに、一般読者向けのポケット版であった。

## §2 『オーベルマン（第3版）』の構成、内容

構成は次のようである。ローマ数字Iは、手紙第1信を指している。

第1年（I-IX）ジュネーヴ、ローザンヌ、キュリ、ティエル、サン＝モリス、リヨン発信

第2年（X-XXV） 発信地 パリ、フォンテヌブロー

第3年（XXVI-XXXV） 発信地 すべてパリ

第4年 なし

第5年（第1断章のみ） 第1断章、第2断章ともに発信地名なし

第6年（第2断章、XXXVI-XLIX） リヨン、シェッセル、リヨン、メルヴィル（架空地名）

第7年（L-LII） リヨン、パリ

第8年（LIII-LXXIII） フリブール、トゥン、シュワルツゼー、シュブリュ館、サン＝サフォラン、イマンストローム（架空地名）

第9年（LXXIV-LXXXIX） イマンストローム、サン＝モリス、イマンストローム

第10年（XC） イマンストローム

巻末（XCI）については日付け、発信地名なし

以上、全てオーベルマンという名の青年が、行き先々の土地から親友（この人物について、読者は最後までほとんど何の情報も与えられることはない）に宛てた91通の手紙といくつかの断章を一まとめにした、という設定である。形式は、18世紀フランスに多く見られる書簡体小説。ラクロ『危険な関係』、ルソー『新エロイズ』、コンスタン『アドルフ』と同様である。「これらの手紙をまとめて刊行する者」によって、出版に当たっての状況説明がされる。「これらの手紙はいわゆるロマン（小説）ではない。劇的な展開もないし、出来事が起きるわけでもないし、結末もない」とある。

筋としては、20歳にして生きることに倦んでリヨンの町に暮らしていた青年が、気の進まない職業を押しつけられたのをきっかけとして、スイスへ向かう。スイスの山々、湖水、その後フォンテヌブローの森、パリ、リヨンなど各地を巡る。絶望に打ちひしがれながら、その10年間を通して、その地で感じ、あるいは経験したこと、思索したことを親友に書き送る。8年目には、自分にとって理想的な土地イマンストローム Imenstròm（永遠の流れという意味の架空の地名）を獲得し、そこに思い描いていた生活を築き上げる。スイス、パリ近郊、リヨン周辺を旅した末に、理想的な生きる場所にたどりついた、という物語でもある。

繰り返しになるが、初版と第2版と第3版（最終版）は同一内容ではない。まず第2版の巻末に手紙XCが、さらに第3版に手紙XCIが付け加えられている。この2通の手紙がどのような内容で、それぞれが付け加えられたことで、この小説 roman 『オーベルマン』全体がどのような意味を帯びたのかについて述べたい。

初版の結末では、友人の妹と心を通い合わせようになったのだが、状況からして諦めるほかはない。レヴィの言うように、「かなわぬ恋」 amour impossible なのである<sup>14)</sup>。自然の中で、生の意味を噛みしめるところで終わっている。

ところが、第2版に付け加えられた手紙XCでは、そのひとが、突然オーベルマンのところに滞在中の兄を訪ねてくる。しかし、人間の生と死についてつきつめてしまったオーベルマンには、この不確かな喜びに身を投じることはもはやできない。彼は自問自答する。「それでは何をすべきなのか？ 結局のところ、自分には書くということしか与えられていない」。彷徨の果てに、「書くこと」を決意した、という物語（まるでプールの『失われた時を求めて』（1912年）のように）であるとも取れる<sup>15)</sup>。

第3版に付け加えられた手紙XCIには、日付けも発信地名も記されていない。サン＝ベルナール峠での遭難が克明に叙述されている。作者セナンクルの足跡を遡れば、これは彼が初めてスイスに入り、滞在地サン＝モリスから足を延ばした山行での体験が下敷きになっている。1840年、70歳になる作家が50年前の青年の体験を付け加えた。この時の負傷がもとで、老人は歩行も困難な生活を強いられているのだ。付け加えられたことによって、初版とも第2版とも異なる内容になった。加齢とともに進行する身体障碍のきっかけとしてのサン＝ベルナール峠での遭難体験が、主人公の体験として付け加えられた。

改めて、全体の構成を整理してみよう。旅する人の書く手紙という形式であることにより、断片的であることが不自然ではなくなる。手紙の連続によって、空間と時間の連続性、一貫性が担保される。さらに大きな特徴は、自画像的小説と哲学的省察が合わされているという点である。1807年刊行の『コリーヌ あるいはイタリア』も、物語が展開しながらも、他に様々な要素、文化論、文学論、イタリア都市案内が加わるのだが、それでも全体として物語の結構の中に収められている。ところが、『オーベルマン』は物語として起伏に乏しい上に、さらに手紙を書く主人公の思索として、哲学的省察が頻繁に展開される。

小説としては、旅行小説（アルプス、パリ近郊の地誌としても読める）とも言えるし、旅行による修行あるいは自己形成の小説であるとも言える。宇宙の摂理を求める、求道的な小説、登山体験小説（自然のエネルギーに出遭い、自らの生命のエネルギーを確認することになる）とも言える。自伝的小説 *genre roman autobiographique* として見れば、まず第一にフランス革命という歴史的事実が捨象されている。1802年刊行のスタール夫人の『デルフィーヌ』の物語が革命の経過とともに展開されるのとは大違いである。

小説の筋とは直接的に関わらずに展開される、哲学的、道徳的な省察を整理してみよう。

手紙 XXVII 自尊心について、第 1 断章 幸福論、第 2 断章 黄金を蔑視する人間について、XLI 自殺論、XLIII 自由についての省察、XLVII 数の考察、XLIX 宗教論、LXIII 愛について、LXX 風土論、LXXX, LXXXI 文学論、LXXXV サン＝マルタン『ものの精神について』、LXXXVI 結婚論

### 3. 『オーベルマン』（第 3 版）における自然

#### §1 旅あるいは移動

先に表として示したが、主人公の手紙は 10 年の歳月にわたっている。手紙 I（第 1 信）はレマン湖畔ジュネーヴから出される。湖畔に沿って、次はローザンヌに。キュリ、ティエル、サン＝モリスまで移動。その後、主人公の故郷のリヨンに戻っている。

第 2 年からは、パリおよびフォンテヌブローに移って、滞在する。フォンテヌブローからは、手紙 XIII（第 2 年目の 7 月 31 日付け）から XXV（同年 11 月 6 日付け）まで、13 通の手紙が発信される。第 6 年になると、リヨンに戻っている。

第 7 年、リヨン、パリ。第 8 年になると、もっぱらスイスに滞在。フリブール、トゥン、シュワルツゼー、シュブリュ館、サン＝サフォラン。そしてついにイマンストローム（架空地名）。この終の棲家からは、10 年目にいたるまで 16 通が発信される。

主人公の足取りを大まかに要約すると、まずスイス・ヴォー地方からヴァレ地方に旅した。フランス語圏内の移動である。その後はフランスへ戻り、リヨンからパリおよびパリ周辺へ移り、主としてフォンテヌブ

ローの森に留まる。8年目になって、スイスへ移動。この時には、自身の理想の居住地を求めて転々とし、ついにイマンストロームに定住する。町から湖畔へ、さらには山岳地帯に。町から森に。再び水辺に。平地から山麓の谷間へ。

主人公の軌跡を地勢上の観点から見てみよう。彼はスイス入り直後の手紙 III で、スイスの大づかみな地理について述べる。「氷河や滝を見に行くのはイギリス風の奇癖であって、ジュネーヴやヌシャテルの湖畔が最も美しい土地だ、と地元の人言うが、自分には魅力はない、もっと別の風俗や自然に触れたい、ドイツ語が話せればルツェルンに行くのだが」と述べる。ルソーの『新エロイズ』の舞台となった、美しい湖畔には魅かれない。手紙 LIV でさらにはっきりと「ジュネーヴ、モルジュ、イヴェルドン、ニド、アネの低地 *terres basses* はスイス的ではない。他の民族の土地に似ている」と述べる。ちなみにこの手紙の前文では、岩山の中にあり、岩山の上でもあり、町の通りはたいていどこも急な坂があるフリブールの町とその住民にスイス風な風貌を認めている。

アルプス山岳地帯のロース渓谷下部に位置するヴァレ地方、サン＝モリスに入る。ダン・デュ・ミディ南齒峰<sup>1)</sup>の登山を試みることになる。手紙 V では、オーベルマンはこの地に山岳と平地 *plaine* の好ましい融合を見出す。「できれば山岳の美と平地の温暖を兼ねた土地が望ましいのだが」。

冬を越すための住居を探して2日目に、牧草地 *près* に囲まれた空き家を見つける。サン＝モリスからの手紙 V で、このシャリエールという地（架空地名のようである）について説明する。「栗畑と牧草地と果樹園の一部が自分のものになる。小作人には、残りの牧草地と果樹園、野菜園、麻栽培地と耕地を任せる」。また、「ロース河の長い谷 *vallée* が見える、この荒れた場所あたりには、大雪が降ると餌を求めて狼が下



りてくるとか」とも。

2年目の夏に、少年期に親しんだ、大好きなフォンテヌブローの森に戻るが、手紙 XVIII で、次のように述べる。

なるほどここには自由に動き回れる土地がある。しかし、それほど野生的でも、人を圧倒することもない。見えるものの形状は低い。岩は小さく、単調である。概して植生は、ほくに必要な、あの力強さや旺盛さに欠ける。近づけないほどの深淵の急流のざわめきも聞こえない。平野の地なのである<sup>2)</sup>。

XXV で、アルプス山岳とフォンテヌブローの森 forêt の具体的な比較がされている。

おおよそのところこの土地（筆者註 フォンテヌブローのこと）は大したものではない。（中略）アルプスのような高地を変えるには、二千年かかる。しかし並みの景勝地 sites の場合は、北風の吹き、数本の倒木、新規の植樹だけで、あるいは他の土地と比べ見るだけで、別物になる。

8年目になって、イマンストローム（架空地名。永遠の流れという意味）を見つけ出す。初めてスイス入りした時の家探しに続いて、2度目である。そして、今度は借家探しではなく、自分の定住地あるいは避難所を腹心の使用人ハンツとともに建設するのである。

LXVI によれば、「ほくはとうとう自分の住まい、それもアルプスの中の住まいにいる」と述べ、「木造の家を建設するために、ラ・グリュエールから職人たちが来ている」と報告する。「ヴヴェ（筆者註 レマン湖畔）経由で、イマンストロームに宛ててくれたまえ」と手紙の末尾にある。

ついに探し当てた場所は、どのような地勢か。LXVIIで、次のように述べられている。

イマンストロームの峡谷（筆者註 gorge ゴルジュ。原義は「喉」である）は、冬の日の沈む方向へ低くなり、開いている。冬の夕暮れには、南側の斜面は影の中に入るだろう。この住まいのある南斜面は落日の輝きにすっかり照らされて、太陽が、その火に燃え上がる大きな湖に沈むのが見えるだろう。

LXVIIIでは、「イマンストロームの峡谷は静かな場所で、上を見ると黒い樅の樹、裸の岩、無窮の空である。下の方には遠くに人の耕す土地が広がっている」と述べる。要するに、サン＝モリスで最初の家探しをした時と同様に、「山岳の美と平地の温暖を兼ねた土地」なのである。

## §2 ティエルの夜

1年目の7月、友人宛に初めてジュネーヴから手紙が出された。次いでヴォー地方レマン湖畔のローザンヌ、キュリから出された。手紙IVが、ティエルからの手紙である。ティエルは、ヌシャテル湖とビエンヌ湖を結ぶ水路の名で、水路に臨む村落の名でもある。

足を留めるつもりもなかった地点であったが、雪解け水で水浸しになった朝景色のあまりの美しさに驚いて、滞在することにした。月の夜に水辺を歩き、さまざまな思いに耽る。「現実の自然において他所者で、人々の間では笑い者」という自己認識を持つ20歳の青年である。

そこで、夜の静寂の中で、ぼくは自分の不確かな運命について、乱れる心について、そしてあらゆるものを包含しながらも、ぼくの願望が求めるものは含まれていないように見える、不可解な、この自然について、尋ねた。

しかし、尋ねてみても、思い至るところは、自身が空虚さの中にいるという自覚である。夏の夜の月がいくら輝いていても、自然は何の返答もくれないからである。

もしほくがこの心に教え込むことができたなら。窮乏にあっても自らを養って行けるように、空虚さ *vide* の中でやって行けるように、この堪らない静寂の中で落ち着いているように、無言のままのこの自然の中で生き続けるように、と。

ジャン・グルニエ Jean Grenier は、「ティエルの夜」と題する 4 ページの論文を次のような美しい 1 行で締めくくっている。

しかし、ティエルの夜はその闇を深くするばかりであった<sup>3)</sup>。

### §3 ダン・デュ・ミディ 南齒峰

ティエル湖畔で夜を過ごしてからすぐに、オーベルマンはサン＝モリスに落ち着き、そこからいよいよアルプス山中へ足を踏み入れる。9 月 3 日発信の VII に、その登山経験が報告されている。「南齒峰の万年雪のある所まで行って来た」という書き出しである。

朝、一つの山塊に取り付くと、頂上はまだ遠くにあったが、登山ガイドを帰した。自力で登ろうというわけだ。時計や金などの携帯品を地面に置き捨て、服も脱ぎ捨てた。身軽になって、岩を攀じ登り、夏でも溶けない積雪の窪地のような所に出た。なおも登り続けて、この山で一番高い鋭峰直下に辿りついた。そこからはもう頂上 (3257 m) を目指すことは不可能であった。山頂直下の絶壁はほとんど垂直で、オーベルマンの立つ地点からおおよそ 500 ピエ (1 ピエは 32.4 cm。つまり 162 m) 以上もありそうに見えた。氷雪の照り返しにやられたのか、雪盲状態に

なり、ものがよく見分けられない。ソシユールやブリ<sup>4)</sup>、そしてスイスについての本は読んでいるが、何と言ってもまだ不案内である。「とは言え、さすがにモン・ブランの巨峰を見違えることはなかった」、とオーベルマンは述べる。しかし、ドモンは、オーベルマンつまり作者セナンクールは、グラン・コンバン Grand-Combin (4314 m) をモン・ブラン Mont Blanc (4807 m) と取り違えているという指摘をしている<sup>5)</sup>。次にヴラン峰、遠くにさらに高いモンテ・ローザらしき山。オーベルマンの到達地点よりも低い、深い谷を挟んで近くに見えているモルクル菌峰 (2969 m)。

ぼくが経験したかったもの、とにかく探し求めていたものはこれであった。巧妙な人の子らが苦勞の末に整えたものごとの秩序にあっては自分自身が不確かであるが、彼らの間にあると何故に具合が悪いのか、を自然に対して問うために登ったのだ。(中略) やっとぼくは自信を持てたと思う。疑念、先入観、不安が一掃される瞬間があるものだ。その時、人は絶対的な、確固とした信念によって、どういふことであるのか、を納得するのである。

ティエルの夜、それまでの「10年間の」(手紙IV) 苦しい精神生活の果てに、自然に向かって発した問いは、この高山を目指してたどり着いた地点で、ひとまず答えを得られた、と言える。

(前略) ここでは目にもとまらないエーテル(筆者註 古代人が想像した天空の精気)によって、視線は果ての無い広大な空間に迷い込む。太陽と氷河の輝きの真中であって、まるで広い夜空のもとにあるように、他の世界、他の太陽を探す。太陽に照らされた大気の上方で夜の宇宙に入り込む。

天に近い地点を目指して攀じ登った主人公の視線は、宇宙の果てに分け入っている。

ディディエは、『小説家 セナンクル』<sup>6)</sup>で、『オーベルマン』が、旅の小説あるいは自己形成の小説あるいはイニシエーション（加入儀礼）の小説であるとも取れる、と述べる。なるほど、小説の始まりはスイスを旅する青年の手紙である。しかし、その後の手紙はリヨン、パリおよびパリ周辺からであり、7年の後にスイス入りするが、この時にはこの地に理想の定住地あるいは避難所を探求するためである。ディディエは、例えばフロベールの『感情教育』の主人公が時間の経過とともに、諦念をもって社会に組みこまれて行ったのとは異なり、オーベルマンは独居のままである、と述べる。旅の小説とも、自己形成の小説とも言えない、と分析する。

さて、それでは『オーベルマン』はイニシエーション小説なのか、とディディエは問う。LXXXVで、オーベルマンは神秘思想家サン＝マルタンの『ものの精神について』<sup>7)</sup>を読んだ、と述べている。みずから登山を行なったのが、特定の宗教集団・結社への加入のための新参者としてのイニシエーション儀式、と取れないこともない。

サン＝マルタン<sup>8)</sup>は、当時フランス各地に分派を作っていたフリー・メーソン結社の一つである、エリュ・コーエンという教団に入り、生涯にわたり、教団創始者であったマルチネス・ド・パスカリを、後にはドイツの神秘思想家であるベーメをも、師として仰いだ<sup>9)</sup>。18世紀啓蒙思想が打ち出した理神論、無神論にも、また既成宗教制度カトリック教にもついて行けない人々をひきつけ、18世紀啓蒙思想から次の世紀のロマン主義思想への移行に大きな影響をおよぼした。

ディディエは、南嶺峰で太陽の雪面への照り返しで、雪盲になったこと、またそれに小説最後の急流に身を投じた時に眼が見えなくなったと

いう記述も合わせて、結社の儀式で信者が布で目隠しをすることを指摘している<sup>10)</sup>。

ジョルジュ・サンド、サント＝ブーヴ、バルザックといったロマン主義作家たちに、サン＝マルタンを伝えたのはセナンクールである、とディディエは述べる。『オーベルマン』執筆時には、セナンクールは、サン＝マルタンを歴史の哲学、想像力の美学的理論の師としていた<sup>11)</sup>。

『オーベルマン』に出てくる数秘学（手紙 XLVII）も、サン＝マルタンの『タブロー・ナチュレール神と人間と宇宙の関係について』<sup>12)</sup>の強い影響を受けていることは明白であろう。

サン＝マルタンの世界観、宇宙観、歴史観の影響を受けた作者によって、オーベルマンにとってのこの世界の相似（アナロジー）と万物照応（コレスポンダンス）が成り立っている<sup>13)</sup>。しかし、結局のところ、ディディエは、南齒峰の試登をしても、イマンストロームに落ち着いて、自己の理想の実現化には向かわないことから、イニシエーション小説とは言い難い、と結論する。

既に1962年にラルティが、『オーベルマン』の緒言の書き出しにある、adeptes という語（（宗教の）信者、（学説などの）同調者、（スポーツなどの）ファン、愛好者、（錬金術の）達人、先行研究者）から、メルランがこの登山をイニシエーションと結びつけて論じたことに対して、疑問を呈している<sup>14)</sup>。

#### §4 森

第25信で、アルプス山岳とフォンテヌブローの森林 forêt との比較がされていることは既に述べた。とは言え、XIIで主人公が「ロマンティックな場所」と呼ぶのは、この地域のヴァルヴァンの森なのである。「アルプス風景のロマンチズム」とも書いている。(LXXXVII)

夕方、森 forêt に沿って歩き、樹々の下、静寂の中をヴァルヴァンに下りた時、急流や窪地やロマンティックで恐ろしい場所に迷い込むような気がした。砂岩がひっくり返っている丘や小さな巢穴、かなり平坦で、まず趣などない土地もあった。しかし、静かで、荒れていて、何も生えていないところに満足した。

オーベルマンは、森の中を歩き回っては、死について (XIV)、永遠について (XVI)、ディドロの美の定義そして秩序について (XXI)、自身の幼少期に経験した印象について (XXI)、自身の渴望について (XXII)、季節の推移について (XXIII、XXIV)、思索をめぐらした。2年目の7月から11月にかけてのことである。

パリにいて、主人公は自分が14歳、15歳、17歳の時、9月になるとフォンテヌブローの森に親しんだことを友人に書いている。(XI)

翌年、ぼくはこの人気のない土地を貪るように歩き回った。通ってきた道に覚えがなくなり、人の歩いた形跡がないと分かると満足して、わざと路に迷った。森の外れまでくると、あの広々とした平地や遠くに鐘楼が見えるのが辛かった。そこですぐに引き返し、森 bois の一番の奥に入り込む。そうして、木々に覆われていない、四方ふさがりの場所を見つけ、砂地と杜松<sup>ネズ</sup>の木しか目に入らないとなると、安らぎと自由と野生的な喜びの感情、それはすぐに幸せになれる年頃に初めて感じた自然が持つ力なのであるが、そんな感情を覚えた。それでも、ぼくは陽気にはならなかった。まあ幸せな気分ではあったが、満足感で興奮しているだけだった。ぼくは喜びながら、屈託していた。そして、いつも沈んだ気分で帰るのだった。

## §5 色、匂い、音

オーベルマンは、第2年目の秋までフォンテヌブローで過ごし、第3年目の3月にパリから友人に手紙を出す。(XI) パリでは、図書館に通ってはブガンヴィル<sup>15)</sup>、シャルダン<sup>15)</sup>、ラ・ルベール<sup>15)</sup>の著書を読みふける生活である。

しかし、イマンストロームに落ち着いた時には、都市での生活について、冷やかな感慨を述べる。「パリではしばらくは幸福でいられるが、全生涯そこで幸せでいられるとは思えない。人間の本性というものは、石の中に、瓦と泥の間に留まって、自然の大景観と永久に切り離されたままにいるとも思えない」。都市での「人との交際も魅力がないわけではないが、失ったものの埋め合わせにはならない」。(LXXII) しかし、そのような石の街の春に、オーベルマンは衝撃的な自然との出会いを果たしている。(XXX)

暗くて、やや寒い日だった。ぼくは打ちのめされていた。何もできないので、ただ歩いていて。手すりほどの高さの塀の上に置かれた、いくつかの花々のそばを通りかかった。黄水仙がひとつ咲いていた。渴望の最も強い表現である。年の初めの香りであった。ぼくは人間に与えられた全ての幸福を味わった。万物の、あの言葉にならないほどの調和、理想世界の幻影が、ぼくの中に満ちた。これより大きく、これほど瞬間的な何かを感じたことは今までなかった。どのような形、どのようなアナロジー、どのような密かな関係によって、ぼくがこの花に無限の美しさを見出したのか、優美で華麗な恋する季節にある、幸せで飾り気のない女性の表情、上品さ、姿勢を見出したのか、分からないだろう。

鮮やかに咲いた黄水仙は、もちろん主人公に漠然とした抽象的な女性



像を想わせたわけではないだろう。生きる者としての欲求と結びついた、具体的な女性のイメージのはずである。

1840年刊行の『オーベルマン』第3版には、70歳の作家によって手紙XCIが付け加えられたことは先に述べた。その手紙の後に、再び日付けのない手紙が付け加えられて、そこで終わっている。花々についてが語られている。

仮に花が目美しいだけであっても、それはわれわれを魅了するだろう。だが、時々あの花の香りが、まるで存在の幸せな運命のように、まるで不意の呼びかけのように、さらに内なる生へと呼び戻そうとする。あの目に見えぬ発散する匂いを自分で求めたからにせよ、花の方が差し出すにせよ、花の方から不意打ちするにせよ、ぼくは花というものを、物質世界が秘密を閉じ込め、覆い隠す一つの思想の、強いがいつときの表れとして受け取る。

色彩もまた花を雄弁に表現している。何事も象徴でありえる。だが、匂いはそれよりももっと心に染み入る。それは多分、匂いの方がより神秘的だから。(以下略)

花の色、匂いが宇宙の秩序の表れであり、象徴である。世界の全てが互いに相似（アナロジー）、照応（コレスポンダンス）として関連し合っている。

8年目、イマンストロームに落ち着く直前の6月に、オーベルマンはレマン湖畔サン＝サフォランに滞在する。「暮れ方、月が出るとすぐ、二艘の舟を雇う」。(LXI) 主人公自身は漕ぎ手と二人で。それとは別の舟に、忠実な従僕のハンツと二人のドイツ女性がやはり漕ぎ手ともに乗る。湖上を進むと、ハンツが角笛を吹き、女性たちが斉唱する。

はっきりした限界のない広がりを感じられはするが漠然として

いる動きに結びつけることによって、何よりも音の旋律が時間的にも空間的にも所有している、あの無限の感情というものを魂に与えるのだ。

突然の知覚によって、宇宙の対照と均衡、関連と構造が示される時、人間が自分自身をそれほど制限され、役に立たない存在ではないと思い、自身の現在得ている生よりも大きな存在であると思うのは当然だ、とぼくは言いたい。この感情こそが、人間にとって、知べき世界の発見のように、いつか明らかになるかもしれないこととの最初の出合いのように、見えるのだ。

音の旋律もまた、色や匂いを感知する時と全く同様に、人間に宇宙の秩序を悟らせる手がかりとなる。また同時に、この文章がコンディヤツクの『感覚論』<sup>16)</sup> に由来していることは、言うまでもない。

## §6 水 ―河、急流、滝―

6年目になって、故郷リヨンにいた時に想いを寄せた女性、デル・夫人に偶然再会する。「ぼくは、きみ（筆者註 手紙を書き送っている相手）と一緒によく歩いた長堀の裏側に、ソーヌ河の近くにいた」。そして「当時と同じように流れるこの河を、また当時のものはもう何も残っていないが、同じように静かで美しい秋空を、ぼくは眺めていた」。(XL) 偶然にも、オーベルマンが想いをよせた女性が、6歳の娘を連れて馬車でやって来た。河は、主人公にとって、重要な記憶に邂逅する場なのである。

10年目になって、別の友人フォンサルプがイマンストロームに滞在する。彼の妹であるデル・夫人が、兄を訪ねて来た。彼女に対する想いを断ち切っていたオーベルマンは、谷の上まで登って行く。谷底を流れ

る奔流の傍に立つ。(XC)

ぼくは、谷の曲がり角に、岩の間にいた。そこから溪流は流れを速め、そして命じておいた歌唱が。歌唱は遠くで始まっていた。だが、その宴会の物音は、風向きが変わるだけでときどき聞こえなくなる。そして、ぼくは歌唱が終わる時が分かっていた。それとは逆に、急流は流れ去りはするが、しかし常に流れ続け、世紀が続いて来たようにその力を保ち続けていたのだ。水の遁走は、われわれの歳月の遁走のようなものだ。このことは、今まで大いに言われて来たが、これから先千年以上も繰り返されることだろう。水の流れは、われわれにとって時間の容赦ない経過の衝撃的なイメージであり続けるだろう。幻影のただ中の急流の音、天空の静寂の下の唯一の音、それだけが聞こえるように。

死すべき人間の運命と永遠。一時の生と永久の時。流れ去る水の様相が、永遠に続く時間のイメージとして捉えられている。当然とも言えようが、『オーベルマン』において、水が時のイメージであることをめぐっては、度々論じられている<sup>17)</sup>。

レモンは、その著書『セナンクール 感覚と直観』<sup>18)</sup>で、急流と花の描写を引用している。「(略) 三月の春分のころ、急流のそば、岩の前で、晴れやかなヒヤシンスとつつましい董の間にいて、自分にも愛することができそうな気がした」。(XXXVII)

花が女性の表象であるように、時間の表象である水は、急ぎ足で流れ続ける。ここまで見た限りでは、オーベルマンは急流の傍観者として、流れに目を凝らすばかりである。しかし、見ているだけでは済まなかった急流との出会いが最後に語られる。サン＝バルナール峠での遭難体験である。これについては、後に別の観点から述べることにする。

イマンストロームに寄留中のフォンサルプのアメリカ人の友人がイタリアへ行くために、アルプス山脈を越える。レマン湖畔を馬車で南下して、ヴァレ地方に入る。途中まで見送りに来たオーベルマンは、マルチニの近くにあるピスヴァシュの滝<sup>19)</sup>を見物する。(LXXXIV)

それでも、水煙にはとばしるしぶきの中に、その水の威圧するような音を耳にしながら坐った時に、何か昔うけた感銘を思い出した。その水は音もない氷から出て、不動の水源から絶えず流れ続け、轟音とともに決して終わることなく消えて行き、淵を穿つために落下し、そして永遠に落ち続けるかのようだ。われわれの歳月も、人間の幾世紀もこのように落ちて行くのだ。われわれの日々もまた、沈黙から抜け出し、必然がその姿を示すが、忘却の中に滑りこんで行く。日々の幻影は単調な音を立てて流れ去り、絶えず繰り返されながら消え去る。日々の煙霧が残り、立ち昇り、後戻りし、既に過ぎ去った日々の影は、説明できず、無用である、あの鎖を覆う。鎖は未知の力の記念碑であり、世界のエネルギーの奇妙で神秘的な表れなのである。

河や急流から得たものは、時間が流れるという感覚であるが、人を圧倒する滝の前では、自然の力、エネルギーについての直観を得る。ミシエル・ドロンは、啓蒙思想転換期におけるエネルギーの観念についての著書の中で、宇宙が力 *forces* の渦であるということは、様々な哲学上の立場でも共通理解であった、と述べている<sup>20)</sup>。ドロンは、ビュフォンが、自然は物でもなければ存在でもなく全てを包含し全てを動かす、生きている巨大な力 *puissance* である、と述べた言葉を引用している<sup>21)</sup>。

## §7 グラン・サン＝ベルナール峠

作者セナンケールが20歳になったかならないかの時のグラン・サン＝ベルナール峠で経験した遭難が、主人公の経験談として、第3版に唐突に付け加えられた。宛先の友人に、「イタリア・アルプスの山越えをしようとした時に陥った苦境のことは、まだきみに話したことはないけれど」、と書き出す。「多分われわれが生をうけたのは、われわれの弱さにもかかわらず、いざと言うときにはエネルギーをもって、ことを遂行する機会に遇うためなのだ、という文章を読んで、その折のことを強く思い出した」。

作者自身も実際にこの苦境に陥ったはずで、それは最初のスイス入り直後、20歳になったばかりであった。小説の主人公オーベルマンも同じような年齢設定である。34歳で出した初版に付いていなかった手紙を付け加えた作者は、70歳になっている。「それ以来、足もとが確かでなくなって、二度と元には戻らなかった」。作家はその遭難に端を発している進行性筋障害に苦しみながら、50年間の明け暮れを生きて来たはずなのだ。この手紙があると無いとでは、全体としての小説世界はまるで別物であると言えるくらいだ。

好天の下、マルチニ（峠越えの拠点地。古代ローマ期の遺跡もある）から徒歩で出発し、峠にあるホスピス（グラン・サン＝ベルナール峠にある修道院付属宿泊所。峠越えの旅人救助のために使われた犬が、セント＝バーナード犬）を目指す。時計をつけていなかったし、登る途中の野外で眠ってしまったせいで遅くなり、天候も急変して雪が降り出し、しかもいつの間にか夜になってしまった。「尖った氷塊の下に着き、驟<sup>ラ</sup>馬<sup>バ</sup>が抜け出せるほどの出口が無いことから、ルートから外れてしまったことが分かった」。目的地の修道院とは、まだいくつもの深い谷で隔てられている。

唯一の打開策が頭に浮かんだ。主流に近づくために、水音を頼りにすることだ。その流れは段々に落ちて、登るときに最後に見た集落の近くを通るにちがいない。実際に、ぼくは闇の中で、昼日中であっても脱出が困難な岩石に囲まれていた。明白な危険が、ぼくの気力を支えた。死ぬか、それとも三里近く離れているはずの村に、あまり遅くならないで辿りつくしなければならなかった。

何とか急流に出る。オーベルマンは、川床の平らそうな所を選んで、ドランス川の氷のような川波に身を委ねた。

波が高所から落ちれば、ぼくも落ちた。激しく落下した時があって、これで最期かと思ったが、かなり深い淵がぼくを受け止めてくれた。どのようにして、そこから脱出したかが分からない。手ではなくて歯が先に岩を捉えたようだ。眼の方は、ほとんど見えなくなって、あまりに強い衝撃が来そうな時には、両眼を閉じたままにした、と思う。ぼくは、何の嫌気がさすこともない熱心さで、先へと進んだ。明らかに、定まった一つの衝動に従い、ためらいなく一つの努力を続けることが幸せであった。このような急激な運動に、このような類の無謀に慣れてしまい、ぼくは、たどり着くことができる唯一の避難所であるサン＝ピエール村のことを忘れかけていた。その時、明かりが一つ見えて、村だと知れたのだ。それを見た時、おそらく本物の勇気ではなく無思慮によるものだが、別にどうとも思わなかった。それでもやはり何とかその家に辿り着いた。家の人たちは火のそばにいた。家の台所の小窓の鎧戸の隅が破れていた。この偶然で、ぼくは命拾いをした。

氷雪の奥底からほとばしり出る流れに乗り、暗闇の中で、10 km 以上

離れた地点まで下ったのだ。岩にぶち当たっても、溺死しても、凍死しても全く不思議はなかった。そして、若者は一日だけ休養し、その次の日の朝、再び一人で歩き出す。峠の修道院で食事を取り、イタリア側のサン＝レミ経由でさらに下り、再びスイス側に向けて往路を戻った。

以下はこの手紙の結びである。

(前略) ぼくとしては、その当時は自覚しなかったが、それ以後足の力がすっかり奪われてしまうことになる、その時の疲労があまりにもはっきりと思い出される。それよりももっと、忘れはしない。今日にいたるまで、自分がもっとも生き生きとして、もっとも自身に不満がなく、もっとも幸福の陶醉に近かった、わが人生の二時間を。その二時間は、骨の髄まで凍え、頑張らなくては、生きなければと力を使い果たし、時々気づく間もなく深淵から深淵に押しやられ、そこから生きて脱出した時にはただ驚いた時間であった。その間、ぼくはずっと自分に言い聞かせ、見る人もない所で誇らかに、ただ言っていた。この瞬間にもまだ、ぼくは自分がなすべきことをするのだ、自分がしたいことをするのだ、と。

手紙Iから、「ぼくは飽和状態というものを知らない。いたる所に空虚さ vide を見つける」とか「自分を取り囲む虚無 néant を感じた」とかの表出である。「心を揺るがすような不安 inquiétude を抱いていることに絶望する時がある」。(XXXVII)「倦怠 ennui がぼくを参らせ、嫌悪感 dégoût がぼくを打ちのめす」。(XLII)「ところが、無気力 apathie が生まれつきのようになった」。(XLII)「絶えず肉体は活気なく、頭は乱れ、魂は不幸せで、眠っていても、苦渋と拘束感と不安な倦怠 ennui というこの感情から逃れられない。これが心の緩慢な末期の苦しみ agonie である。人はこのように生きるべきではない」。(XLVI)『オー

ベルマン』全編にわたり、主人公がみずから内面を表現するキーワードが繰り返される。時として、自死について、アルプス山中での自死についての思索もめぐらされる。(XLI, XLII)

このような精神状態の主人公が、生命の危機にさらされると一転して、「絶望のエネルギー」<sup>22)</sup>が、湧き出てくる。自然の凄まじいエネルギーに対抗して、人間の全身全霊に、本人にとっても思いがけないエネルギーがみなぎって来る。生の倦怠感が反転して、そこには生の充実感があった。

革命もその勃発から終焉まで、権力に対抗しようとする意思、破壊しようとする暴力、人間社会のエネルギーの発揮が歴史を形成して行った。セナンクールと同世代の作家、コンスタンのみならず、「スタール夫人にとって、歴史の推進力は自由の精神、つまり一人一人の個人的精神のエネルギー、諸民族の集合的精神のエネルギーなのである」<sup>23)</sup>。

『オーベルマン』において、作家が歴史の中に踏み入ることがなかった(主人公の破産についても、革命についての言及はない。(手紙XXXV))ことが、このエネルギーという概念をめぐっても確認できる。

## §8 風景

この小説が今日にいたるまで存在感を残しているとすれば、それは、哲学的な思索の他に、何と言っても、圧倒的に美しい自然描写の数々である。

実は、セナンクールは、とくに風景 *paysage* という語を使っていない。斬新な光景 *un spectacle nouveau*、自然風景 *les sites naturels* (II)、この偉大な眺め *cette vue grande* (VII) のような語の使用で開始する。しかし、例えばオギュスタン・ベルクは、「風景における水と山」という題で講演を行なった<sup>24)</sup>。その原題は、*Des eaux et la*



montagne au paysage である。ヨーロッパよりはるか以前の4世紀の中国で「山水 shanshui」という語で「風景 paysage」を表わしていた、という内容である。今日のわたしたちの言語意識からすれば、セナンクールは風景 paysage について述べているのだ。

シュタウプは「オーベルマンの風景」という論文で、風景 paysage の語義を検討している。「自然の限りない全体の中で切り取られた断片」、あるいは「実用目的ではなくて、美学的意図による自然に対する態度」という定義を辞書から引き出している<sup>25)</sup>。

セナンクールの風景描写は、勿論ヨーロッパにおける古代からの人間の自然に対する意識の変遷の上でなされている。ニコルソンは『暗い山と栄光の山』<sup>26)</sup>の序論で、山岳は「自然の恥と病であり、それさえなければ美しいはずの自然の表にできた疣、<sup>イボ コブ</sup>瘤、火ぶくれ、腫れものであった」、と述べている。アルプスは、天候が変わりやすく、険しい崖端の道を縫いながら登り下りする旅人は、場合によっては驃馬<sup>ラバ</sup>もろとも谷底に墜落するのだから、恐怖の対象以外の何ものでもなかった。山岳も含めて、自然の風景がオーベルマンの憧憬や崇拝の対象となっている。そこにいたるまでのヨーロッパの精神史については、様々な角度から追跡することができるだろう。しかし、その変遷が最も如実に表わされるのは、風景画の歴史ではないだろうか。とりわけケネス・クラーク、越宏一の著書は、風景画がどのように出現したかというテーマを追求し、古代ギリシャ・ローマから中世を経て、17世紀北方ヨーロッパの風景画芸術の確立までのパースペクティヴを展開して、まさに圧巻である<sup>27)</sup>。

オーベルマンにとっての自然とは、次のようなものである。「秀麗な山々、積雪の崩落、森の中の小谷のひっそりとした静けさ、小さな流れが音もなく運んで行く黄葉！ もしきみたちが他の人たちのことを少しも語ってくれないならば、きみたちは人間にとって何であろう？ もし

他の人たちが存在しなくなったならば、自然は押し黙ったままだろう」。

(XXXVI) 自然描写は、それを眺める人の心象風景なのである。描写に共鳴し共感するのは、それが描写する人の心情を表わしているからだ。

だとすれば、次の描写は、縹渺たる自然と一体化し、自身の足場が失われたかのような、主人公の存在意識を表現している、と言える。

ほくはジョラの松の木立の下に坐っていた。夕暮れは美しく、林は森閑として、風もなく、落日は靄がかっていたが、雲はなかった。一切が落ち着き、照らし出され、じっと動かない。(中略) ほくは下に敷いていた苔を長らく見つめてから、目を上げた瞬間、圧倒されるような幻覚に打たれた。ほくが夢想に耽ったため、幻覚は続いた。湖水まで延びている急勾配は、ちょうどほくが坐っている小丘のせいで、見えなかった。それで傾いて見える湖面が、対岸を空中に高く上げているように見えていた。サヴォア・アルプスの一部にかかっている靄が、山岳と溶け合い、同じ色合いに染まっていた。ヴァレ地方の奥の落日の光と大気の波のせいで、これらの山々は高く上げられて、地上から分け離され、山端は見分けがつかなくなっていた。(中略) 虚空の上、ただ一人、無限の中にいるほくを支えているのは、もはや坐っているこの地点しかなかった。(II)

第3断章では、上の文章に似た、幻想的な落日の湖面と岩山の風景が描写される。注目すべきことは、この断章が「ロマンティックな表現」という副題が付されていることである。

そして、地球から離され、中空にかかったようなこれらの山々の下で、きみたちは足もとに天空の空虚と世界の無限とを見るだろう。特権と忘却のひと時がそこにある。空はどこか、山はどこか、そして何の上に連れてこられたか、もはや分からない。高度もなければ、

地平線もない。思考は変化し、感覚はかつて感じたことのないものになった。きみたちは普通の生活から抜け出てしまった。

苦悩にあえぎながらも自然と向き合い、それでも空虚感は去らないが(LXIII)、それだけで終わらせはしない。空虚で無限な風景を描写することによって、自身の精神に対応するものとして、それを隠喩するものとして、意味づけた。苦渋に満ちた、おのれの人生。しかし、自然の中に溶け込み、生の意味を捉えなおす。万物が照応するというものを「共感覚」によって言語化し、新しい詩学、新しい思想として示すことができたのだ。

#### 4. セナンクールの自然観

『オーベルマン』に表わされた自然の諸相を見てきた。最後に、自然そのものについて述べられた文章を見よう。

ぼくは自分を愛する。しかし、それは自然の中にある自分だ。自然が望む秩序の中にある自分だ。自然が創った人間と付き合う自分、万物の普遍性に合っている自分なのだ。(以下略) (IV)

セナンクールの自然への愛着は、終始一貫している。愛好すればこそ、そこに溶け込み、その中で自分を取り戻すこともあり、また自然と一体化して、そこからロマン主義の原理を引き出すこともできた。

その自然は、機械論的な世界ではなく、有機的な関連性を有する宇宙であった。そこから、19世紀象徴主義の詩人ボードレールへは指呼の間である。

(前略) 心に感じる自然とは、人間との関係でしかない。そして、

万物が雄弁に語りかけるのも人間が雄弁に語るからだ。肥沃な土地、無窮の天空、過ぎ行く水の流れは、われわれの心が産み出し、また保つ、関係の一つの表現でしかない。(XXXVI)

主人公は「人間は自然の代理者である」と述べる。この世界観、宇宙観が、神秘主義思想家のサン＝マルタンから強い影響をこうむっていることは先に述べた。「人間のなすべき仕事」は、「世界の改善と再生である」とも語られる。(XLII)

人間は、自然の仕事の仕上げをし、磨きをかけるために、自然によってやとわれた自然の代理者であると見なされる。手に入る原料を応分に活用し、形の整っていない混合物を調和の法則に従わせ、金属を純化し、植物を美しくし、成分を抽出あるいは結合し、原料を揮発性物質に、そして不活性物質を活性物質に変え、それほど進化していない生物を人間に近づけ、人間自身も火、光、秩序、調和、活気の宇宙的な原理に向けて、みずから高まり、前へ進むために。(XLII)

人間が代理者ということは、人間は自然の一部分ということになる。そうであるならば、自然の猛然たるエネルギーに遭遇して、思わず知らず、みずからのエネルギーを発揮した経緯も当然の成り行きではあった。

セナンクルの同世代人であるスタール夫人のレマン湖畔コベ館のサロンでも、神秘思想に関心が持たれ、静寂主義の神秘思想家フェヌロン<sup>1)</sup>が読まれていた。彼女の愛人にして盟友であったコンスタンは、従兄弟がローザンヌで主宰する神秘主義のセクトに通った。コベ館には、ドイツ旅行先から連れてきた神秘主義に近い文学者アウグスト・ヴィルヘルム・フォン・シュレーゲルが滞在した。ド・クリュドネル夫人やヴ

エルナーなどの文学者にして神秘主義者の来訪もあった<sup>2)</sup>。スタール夫人もコンスタンもプロテスタントであるが、理神論から無神論にまで先鋭化した18世紀啓蒙思想の神髄たる理性によって育まれ、しかし、喪われてしまったかもしれない宗教感情を取り戻すために、神秘主義に深い関心を寄せた。そして、そこから汲み上げたものから、それぞれの思想を形成したのだ。

『自由な瞑想録』、『道徳・宗教の伝統の歴史』の執筆を通じて、セナンクールの神秘主義の探求は継続された。それは、ナポレオン失脚後に王政が復古し、出版言論の自由の弾圧（1819年）、瀆聖処罪法（1826年）と続く保守反動体制のフランスに生きる作家にとって、厳しい闘争を意味した。

## 註

### 1. セナンクールについて

- 1) 17, 8世紀のフランスで、独特の恩寵論、道徳的厳格主義、聖俗の体制腐敗に対する闘争、神秘への深い感受性、終末待望などの側面を持つ信仰。
- 2) スイスの地質学者。 *Voyages dans les Alpes*, 1779-96年刊行。1787年にモン・ブラン登頂。
- 3) フランスの博物学者、作家。ヨーロッパ各地を放浪し、マダガスカル島などに遠征。  
*Etudes de la nature*（1784年）に所収の小説 *Paul et Virginie* で有名。

### 2. 『オーベルマン』について

- 1) Z.Lévy, *Senancour, dernier disciple de Rousseau*, Nizet, 1979
- 2) Béatrice Didier Le Gall, *L'Imaginaire chez Senancour I*, José Corti, 1966, p.72
- 3) Béatrice Didier, *Oberman*, Librairie générale d'édition, Livre de poche, 1985
- 4) *Obermann* Dernière version, Honoré Champion, 2003
- 5) 4) に同じ, p.16
- 6) Guy de Pourtalès, *De Hamlet à Swann*, Crès, 1924, p.83
- 7) A.Monglond, *Le journal intime d'Oberman*, Arthaud, 1947
- 8) 「〈自然〉はひとつの神殿」という書き出しの14行詩の中の1行。Charles Baudelaire,

*Fleurs du mal*, 1857 阿部良雄訳『ボードレール全集』I、ちくま文庫、1998年

- 9) A.Monglond, *Le journal intime d'Oberman*, pp.45,268
- 10) J.Merlant, *Sénancour (1770-1846) poète, penseur religieux et publiciste sa vie, son oeuvre, son influence*, 1907
- 11) G.Michaut, *Senancour, ses amis, ses ennemis, études et documents*, 1909
- 12) *L'Imaginaire chez Senancour*, José Corti, 1966
- 13) J.Monnoyer, *Obermann*, Gallimard, Folio
- 14) 1) に同じ、p.133
- 15) 4) に同じ、p.32

### 3. 『オーベルマン』（第3版）における自然

- 1) 標高 3257 m。ローヌ渓谷からの標高差およそ 2800 m。B. Demont, *L'image des Alpes suisses dans Obermann de Senancour: la composition d'un espace mythique, L'espace géographique* I, 1993 による。アルプス山脈としては、それほど標高差ではない、とある。確かに、日本の山脈とは異なり、ヨーロッパ・アルプスは高く屹立する独立峰の連なりである。
- 2) 以下、*Obermann* Dernière version からの引用文は、全て拙訳による。
- 3) les plus belles pages SENANCOUR, *MERCURE DE FRANCE*, 1968, p.23
- 4) Bourrit, *Nouvelle description générale et particulière des glaciers*, 1785
- 5) 1) に記載の研究論文と同じ。
- 6) B.Didier, *Senancour Romancier Oberman Aldomen Isabelle*, SEDES-Paris, 1985
- 7) Saint-Martin, *De l'esprit des choses*, Paris, 1800 今野喜和人訳『キリスト教神秘主義著作集』第17巻、教文館、1992年
- 8) Louis-Claude de Saint-Martin (1743-1803)
- 9) 今野喜和人著『啓蒙の世紀の神秘思想 サン＝マルタンとその時代』東京大学出版会、2006年
- 10) B.Didier, *Senancour Romancier Oberman Aldomen Isabelle*, SEDES-Paris, 1985, p.161
- 11) B.Didier, Senancour et Saint-Martin, *Les Cahiers de Saint-Martin*, t.III, 1980, p.48
- 12) Louis-Claude Saint-Martin, *Tableau naturel* 村井文夫訳『キリスト教神秘主義著作集』第17巻、教文館、1992年
- 13) 11) に同じ、p.52
- 14) M.Larroutis, *Monde primitive et monde idéal dans l'oeuvre de Sénancour*, *Revue*

*d'Histoire de la France*, janvier-mars, 1962

- 15) Bougainville (1729-1811) フランス海軍を率いて世界周航を遂行。Chardin (1643-1713) インド、ベルシヤに旅行。La Loubère (1642-1729) シヤム駐在外交官。
- 16) Condillac, *Traité des Sensations*, 1754
- 17) M.Noël, Le Thème de l'eau chez Senancour, *Revue des sciences humaines*, juillet-septembre, 1962  
A.Pizzorusso, *Oberman* et la conscience du temps, *Littératures*, automne 1985  
A.Colsman, R.Formanek, C.Kaltenbach, I.Klumpp, K.Schmidt, K.Schmutz, H.Walter, S.Weigel, Réflexions sur la structure d'*Obermann*, Autour d'*Obermann*, *Recherches et travaux*, Université de Grenoble, 1987
- 18) M.Raymond, *Senancour Sensations et révélations*, José Corti, 1965, p.30
- 19) ビスヴァシュとは雌牛の排尿。この散文的な名称はアルプスではざらにあるとか。  
R.Bourgeois, De la dualité à l'oxymoron: le nombre, l'espace et le temps dans *Oberman*, Autour d'*Oberman*, *Recherches et travaux*, Université de Grenoble, 1987
- 20) M.Delon, *l'idée d'énergie au tournant des lumières 1770-1820*, puf, 1988, p.183
- 21) Buffon, *l'Histoire naturelle*, 1749-89
- 22) J.Sgard, L'énergie d'*Obermann*, Autour d'*Obermann*, *Recherches et travaux*, Université de Grenoble, 1987
- 23) M.Delon, *l'idée d'énergie au tournant des lumières 1770-1820*, puf, 1988, p.234
- 24) A.Berque, 2009-9-27 於東京日仏会館
- 25) H.Staub, Paysages d'*Obermann*, Autour d'*Obermann*, *Recherches et travaux*, Université de Grenoble, 1987
- 26) 小黒和子訳、国書刊行会、1989 年
- 27) 越宏一著『風景画の出現』岩波書店、2004 年  
クラーク著 佐々木英也訳『風景画論』ちくま学芸文庫、2007 年

#### 4. セナンクルの自然観

- 1) François de Salignac de La Mothe Fénelon (1651-1715) フランスの聖職者。
- 2) 佐藤夏生、スタール夫人の神秘主義について、「人文研究」、神奈川大学、83 号、1982 年